

山と博物館

第10巻 第4号

1965年4月25日

大町山岳博物館



「クロユリ」に思う

「クロユリ」は伝説にいろどられた高山植物である。越中城主佐々成政が身をほろぼしたのも、小姓との密通をうたがわれて、死んだ愛妾早百合が生前「立山にクロユリ咲かば佐々家滅亡せん」とのろったからといわれる。そしてアイヌ男女の悲しい恋物語など、クロユリは々悲劇の花々でもある。

このクロユリが最近北アから姿を消しているという。もちろん心ない登山者の乱獲によるものだが、ホントウに残念である。

6、7年前学生だった頃コロナ観測所のある乗鞍岳で2ヶ月間高山植物の監視員をしたことがある。仕事の合い間によくお花畑を歩いたが、このときクロユリが一面に咲きほこっていたことを思い出す。

昨年登山した山博学芸員からそこにクロユリは見あたらなかったときいた。

数年の間に絶滅してしまったらしいが、なんともやりきれない気持だった。

わが国にはむかしから花泥棒は風流々々というあやまったことわざがあり、こんなところから私物でない高山植物が荒されるのかもしれない。

国立公園内で草木一本とっても文化財保護法もしくは自然公園法などにふれるということを登山者自体が知らないのだろうか。

クロユリ、コマクサなど絶滅の危機にさらされている高山植物は多い。いま果民ぐるみで保護に乗り出さなければ、あとできつとりかえしのつかないことになるだろう。

(米山三男)

ノルウェー便り (その1)

冬のスカンチナビアを訪ねて

太田昌秀

どにみられます。)

これは遠い国からの便りです。幼い頃、高瀬川の瀬音を聞いて育ったある男が、今日日本とは全く反対側のユーラシア大陸の西の端の国、ノルウェーにやってきました。その都オスロという街に住んでいます。オスロといわれても地図を開かないと判らない人があっても、クリスチャニアという言葉なら聞いたことがあるでしょう。—そうです、有名なスキートの回転技術の名前です。クリスチャニアというのはオスロの古い名前なのです。また世界史や地理のときにバイキングという名を聞いたこと、海賊映画でバイキングというのを見たことのある人もいるでしょう。ノルウェーという国はヨーロッパの北西の端にあつて、大西洋に長い海岸線を向けており、かのバイキングの故郷なのです。

スカンチナビア半島には無数の入江があり、フィヨルドと呼ばれています。その昔、今から十万年も前にこの半島を覆っていた、大きな氷河がけすりとった深い谷に、海水が入り込んできた特別な湾なのです。川の水は谷を下って山腹をけするとき、V字型といって川岸の断面がVという字の型になります。永河が川のように山腹をけすと、底が広く平らなUという字の型の谷を作ります。この深い谷から水が消え、土地が少し沈んで海水が入ってくる、フィヨルドという地形になるのです。(川の作った谷に海水が入ってきた谷をリアス式海岸といひ、東北地方山陸海岸な

この国は何と北緯五八度から七一度までと、とても北の方にあります。最北端のスピバルド島(スピッツベルゲン島)は北緯七十七度から八十度までです。もうすぐ北極です。ですから猛寒に寒いはずですが、それほどでもないのです。それはこの国のすぐ西をアメリカからはるばる流れてきた、メキシコ湾流という暖流が流れていて、その運んでくる熱量のために気候は比較のおだやかなのです。でも冬はやっぱり寒いです。信州どころではありせん。札幌よりもっと寒い日が続きます。それに冬の間はとて日短いです。

私がこの国へ着いた時は十二月十一日でした。真夜中にオスロへ着き、翌朝明るくなってきたので、起きて顔を洗い、時計をみると十時半でした。時計の奴が止ったのだと思ひホテルの食堂へ朝めしを食いにいくと、「十時まででした。」と云います。よく時計をみると動いていました。かくして私はノルウェー—第一日目の朝めしを寝坊して食ひそこなつてしまいました。何のことはなく、朝は十時半に日が出て、二時半に沈むのです。しかも陽は昇るといふセンスではなく、ゆるい丘に沿って横這いするだけなのです。全てのものの影が長く尾を引き、朝やけと夕やけがくっついてしまつて、日中もほんやりと赤みがかった空です。二月になった今は毎日陽が永

くなり、7時に朝やけがはじまり、夕やけは6時頃まで空を染めています。それは実に美しい夕やけです。日本ではとても見られない幻想的な美しさです。

快晴が続くと空気が清らかに冷え込んで、水気が枯木に霜花になって附着し、とても美しい景色です。雪はすばらしく軽い粉雪で見事な板状や核晶の形の雪の結晶が大きく育っています。

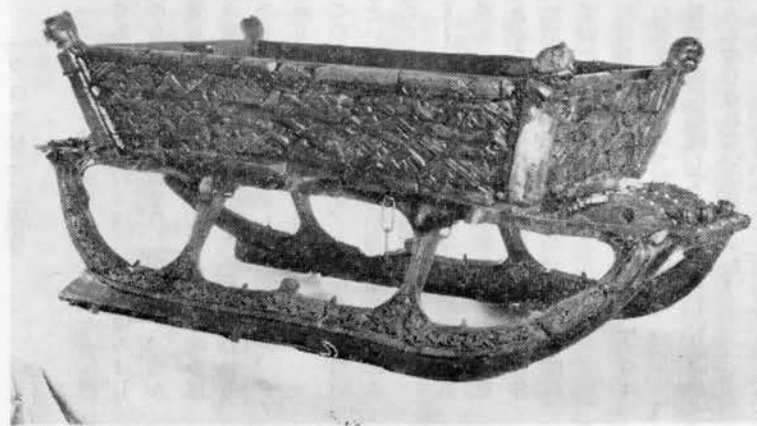
その美しい山へ、この国の人々はみんなスキーに出かけます。街はずれの道はモレイン(水河のとけた時残していった石の丘)の上や古いタンネの森の中に消えていて、その森の中には縦横にスキー・ツアーのコースがひらかれています。人々は車の屋根にスキーをくくりつけ、街はずれまでやってきて、スキーをはくと次々に森の中へ走り去ってゆきます。森の中には沢山の氷河の残した湖があつて、完全に凍つており、その上をとても考えられない位沢山の人が歩いていきます。みんな距離競技に使うような軽い軽いつァー・スキーをはいて、ヒザまでのニツカズボン(女の子も同じ)で、なだらかな森の中の丘を走り下り、かけ上つて一日六〇Kmも八〇Kmも歩きます

今は美しい娘や若者が、この国特有の幾何学模様のセーターを着て、金髪をなびかせて走っています。娘達は表情に富んだ青い眼、やせ型の見事なスタイルで、それにみんなお人好しで、明るく、誰とても愛想良く話します。娘に限らずこの国の人々はみんななつこく親切です。街で働く人々は四時半に仕事が終わ

ると夕めしをすませて車で山へ出かけます。スキーの主要コースには夜も電灯がついていて、夜中までツアーを楽しめます。多くの人が六時頃から三時間位山を歩き、家に帰るとシャワーを浴び、熱いお茶のみ、パンにハチミツをぬって夜食を食べてねるのです。私はこの国の冬程健康な冬はそんなないだろうと、つくづく思います。

黒い深い森の中を、粉雪にシニプールを残して歩き続ける姿は、この国の人々の心の美しさをそのまま表現しているように思われます。(北海道大学理学部 在オスロ)

一一三四年頃のツリ



山の詩歌碑

福沢武一

尾崎喜八詩碑

—美が原山頂避難塔—

峽のどんすまりがバス終点。ここからは岩場の上り坂。山脇を心細い道がせり上っている。野々入川の水音が次第に足もとから離れていく。おおむね木陰の道。けれど、汗が体じゅうに流れた。山小屋にたどりついたとき、疲れと空腹でへとへと。

小屋の裏からは丈の低い草におおわれた台地。軽装の大人や子供で賑わっている。尾根一つ向うの台地、——そこに見えつかくれつするのは霧にまかれた無線塔……。

いそいだ甲斐あって、詩碑の面、避難塔の東側に、頭上の陽が斜めにこぼれている。いそいでシャッターをきる。その間にも霧が太陽をかすめる。牧馬の一隊がたてがみをふり立てて台地を横切っていく。勇壮な眺め。子供たちが歓声をあげる。馬のいななきが肌寒い空気をふるわす。

碑といっても、塔の外壁のやや高いところにはめこまれた銅板。材は砲金で、黒ずんだ鉄板といった感じ。そのため、自筆の字もうるおいに欠ける。横、九七センチ。縦、四七センチ。塔全体の高さは五メートル越えようか。時の県観光課長下平広恵氏のきも入りで塔の完成したのは昭和二九年。その壁面に山岳詩人尾崎氏の詩「美が原」が堂々と飾られたのはふさわしい。その詩は実にいい。

登リツイテ不意ニ開ケタ眼前ノ風景ニシバラクハ世界ノ天井ガ抜ケタカト思ウ。ヤガテ一步ヲ踏ミコンデ岩ニ跨リナガラ

此ノ高サニオケル此ノ広ガリノ把握ニ尚モクルシム。

無制限ナ、オオドカナ、荒ツボクテ新鮮ナコノ風景ノ情緒ハタダ身ニシミルヨウニ本原的デ

尋常ノ尺度ニハマルデ術ガ外レテイ。格調が高くて、男性的。手ばなしに歌いあげている。この台地の賛歌として最高のもの詩の後段は次のようになっている。

秋ガ雲ノ砲煙ヲドンドンアゲテ空ハ青ト白トノ目モサメルダンダラ物見石ノ準平原カラ和田峠ノホウヘ一羽ノ鷲ガ流レ矢ノヨウニ落ちテイツタ。

残念なのは、きょうは霧がわいて、詩のように景観をほいままにできないこと。

尾崎氏は明治三五年、東京に生れた氏の人間形成にはロマン・ローランがぬきざしならない影響を与えた。トルストイ、ワズワース、マラルメ、ヘッセ等の文学者、バツハ、モーツァルト等の音楽家に親近した。そうした広い教養によって氏の人物と詩とはつちかわれていった。ヒューマニスト、——これが氏の本質。若年からの同志は高村光太郎と白樺の人々だった。限りなく自然を愛し、山にあこがれ、終戦直後七年間富士見高原に滞留し、詩魂を深めたのだった。

思い思った目的を果した僕は、おもむろに歩きだした。物見石山を背に茶臼山の方へ。道は草地につつまれている。ときおり霧がおそい陰惨な気配につつまれる。尾根の鼻にでる。ここからは一路ジグザグに七曲りの下りがはじまる。ここだ、尾崎氏が「美が原」を歌っ



たのは。「岩に跨りながら」と氏が述べたように、僕も岩に腰をおろす。足もとにグシナイフウロが桃色の花を織っている。まっけているのは高山蝶。

(後記) 先年、はからずも尾崎氏に面接する機会があった。ここでは詩碑について聞き知ったことに限って書きとめたい。——「美が原」は現地で半ばでき、下山して完成された

遠い分身

海拔二千メートルの曠野の草から鐘をつるした避難塔が立っている。人は一甍の詩を銅板に刻んで

安山岩のその表面にはめこんだ。——私の詩だ。あわれ、ほかの誰の詩でもなく或る年の秋に私がその夕日に書いた私自身の「美が原」の詩だ。

今夜東京には寒々と冬の雨が降っている。それならば北方の遠い信濃はおそらく雪だ雪は吼えたける風に巻かれてあの高原のあの広大なひろがり悲しく暗く濛々と駆けめぐっていることだろう。

鐘は深夜の烈風におもたく揺れてその青銅の舌で鳴りつづけているかも知れない。そして私の詩碑が他郷の夜の吹雪のなかにじつと堪えていることだろう。

いとおいしいのは、しかし雪の夜も赤や黄にツツジの燃える春の日もすつき、尾花や、松虫草の秋といえども同じことだ。

なぜならばあの詩あの文字はまさに私の一部であり

その私がこの世ではまだ生きの身だからだ死んでの後は知るよしもない。せめてなお生きて喜び悲しむかぎりは、人々よ、どうか私の詩を私とだけ在らせてくれ。

(「花咲ける孤独」)

氏ご自身も銅板のときには満足していられない。片仮名書きにしたことも。七曲りを登りつめたところの自然岩に移したいと念じていられる。それにしても、山上の銅板は氏にとって愛児に等しい。その点は氏ご自身の次の作品が最も雄弁に語ってくれている。

コムクドリ

長沢修介

今年は何年になく春の来るのが遅れ四月に入ってから何度かの降雪を見た。

この数年来の私の手許にある記録を見るとヒバリの帰って来るのが、田のあぜの雪が消え黒々とした土が始める三月四日頃、それと前後して漂鳥のキセキレイもほつほつ姿を現す。ヒバリの嘯りは毎年決って一五日から一八日のうちに初嘯りが聞かれた。

この頃春の雪が降ることはあってもすぐ消えるのが普通で二〇日頃イワツバメが飛来しそれよりやや遅れて春の使者ツバメがやって来るのが例年の慣であった。

ところが今年の記録をみると、ヒバリが現れたのが三月一八日、三月二〇～二一日に五〇cm近く雪積りこの雪なかなか消えず。二三日夕刻市内にイワツバメ二羽飛来したのを目撃、しかし雪がまだ屋根などに二〇cm位も残っていた。翌二四日雪が降りイワツバメ姿見せず。三月二七日イワツバメ二羽昨年の古巣から出入するのを夕刻みる四月一～二日降雪二〇cm又冬に逆戻りイワツバメ、ヒバリ姿見えず。

四月六日頃になつてやっと雪がなくなり八日初めてヒバリの嘯りを聞く。九日キセキレイの姿各所でみかける。十一日夕刻ツバメ一羽飛来するをみる。十一日夕方ツバメの姿ちらほらと見当るようになる。市内各所にイワツバメ多数見る。十七日イワツバメ集作り始

む。ツバメの姿まだ多くなし。

以上が今年の記録であるが大体例年より二三日遅れて飛来した漂鳥や夏鳥は雪か寒さのため又戻って一〇日位は遅くなっている。

この写真のコムクドリは十九日早朝飛来したばかりのものを写したもので、雌雄ともほんやりしていた。この鳥は例年四月下旬頃帰って来、本州中部以北と北海道で蕃殖し秋には大群で本州を南下しマライ群島迄渡る。春の渡来は秋ほどの大きい群を作らず飛来する様だ。暖い南の国から飛来した彼女は山々に残っている雪をみつめて、この寒い国に驚き又長い旅の疲れもとれず、まだ飛来するには少し早かったかなと思案顔だった。



博物館 ニュース

「郷土の風物写真展」を計画

五月一日～七日まで、山博展示室で「郷土の風物写真展」を開催することにした。

北アルプスの麓にある郷土は、変化に富み美しく味わい深い風物に恵まれているので、今から優秀作品の出品が期待されている。

郷土色の豊かなもので、白黒、カラーいずれでも良く、四つ切り以上、四月二十九日締切りで審査員には山岳写真家として著名な田淵行男氏が予定されている。

この「郷土の風物写真展」はコンクール形式をとり、技術の向上と、山博の郷土写真資料の充足を図ることがねらいに含まれている。優秀賞には五〇〇〇円と記念品、ほかの各賞にもそれぞれ賞金と記念品が贈られる。

「山博を無料公開」

子どもの日記念事業

五月に入ると日曜祭日続きで、こどもも学校を休む日が多くなるので、余暇利用と館の教育活動と結びつけて、五月五日市内小中学生に山岳博物館を無料で開放することにした。社会訓練と学習の手助けになり、山博の理解に役立てば一石二鳥となると目くろんでいる。この事業には午前九時から午後三時までと時間の制限がある。

公園広場で各種の催

遅いつめたい春だったが、山博の桜もこのころ漸やく蕾みに色さしはじめ、月末から五月のはじめにかけて見頃となりそう。

ことしは黒部ダムの開放が四月二十日からだったので例年になく前庭に賑わいを呈しているが、市内各団体でも公園広場を使つての催の計画がふえている。

四月二十五日から五月五日まで市商工会議所等の主催で大町さくら祭。花火が打上げられ、夜はほんぼり、とうろうで春の夜空が色どられる。

四月二十六日、大町ライオンズクラブの植樹祭、吉野桜三十本がクラブ員の手で植栽され公園から裏山一帯が桜の園となる日も近い。五月二日、大町いすゞ会の「娘と花と車」の撮影会、東京から美しいモデル嬢も招かれて来場、腕を競う、盛沢山の賞品も用意されているよし。

今年も「山の自然科学教室」を

一時開催が危ぶまれていた「山の自然科学教室」も関係者の努力で今年も開設することになった。第9回目だが、都の関係者側も共催等で熱意を示し、本館の体制も一名増えて充実し、市内コースを採ることでスケジュール過多を解消し、各業者の御協力もあり、開設にふみきった。今年には地元中学生も一部参加できそう、今後は山と都会を結ぶ学習、研修の場と発展させたいものだ。

お願い 「山と博物館」の購読者をつつておられます。年間三〇〇円(送料共)大町山岳博物館宛お送り下さい。

表紙説明

フキノトウ

撮影 海川庄一

山と博物館 第十巻第四号

発行所 長野県大町市TEL(大町)二二

大町山岳博物館

印刷所 大町市上仲町

信州印刷大町工場